

◆あなたに語る・時代を超えて生きる心◆

てんじ かいせつ
 展示中の作品について、研究員が分かりやすく解説します。

さんかくぶちしんじゅうきょう なぞ
 三角縁神獣鏡の謎

日本の考古学研究の「謎」のひとつが、3～4世紀の古墳から出土する「三角縁神獣鏡」という銅鏡です。「邪馬台国の女王卑弥呼に関わる鏡だ」とか「いやそうではない」などの議論がほぼ100年にもわたって行われてきました。そして、今なお多くの矛盾する解釈があります。ここでは「三角縁神獣鏡をめぐる議論」を整理してみましょう。

まずはこの鏡をよく観察してみましょう。(図1)は愛知県犬山市の東之宮古墳から発見された「三角縁三神二獣鏡」(重文)です。青銅鑄造製。銅質も上等で、あまり錆びて

いません。用語がちよっと難

しいのですが、その呼び方に

は原則があります。まず「三

角縁」という名前です。いつ

たいどこが三角なの?と思う

かも知れません。鏡の縁の部分

の「断面の形」が三角に

尖っていることが理由です。

次に「三神二獣」ですが、神

様、それも中国の神仙(西王

母とか東王父など)、と獅子

のような霊獣(実在の獣では

ない)とが交互に配置されて

います。神様の数が二ならば

二神、三ならば三神、四なら

ば四神となるのです。獣像も

同じように数えます。これらを組み合わせると「三角縁三神二獣鏡」となります。

三角縁神獣鏡の特徴は、①直径が21～23cmほどと一定していて、日本の古墳出土鏡の中では大型品だということ。②縁の断面形が三角になっていて、ほかの銅鏡からは明確に



図1 重要文化財 三角縁三神二獣鏡 愛知県犬山市東之宮古墳出土
 3世紀 直径23.8cm 京都国立博物館蔵

区別されること。③神像と獸像が交互に配置されること（パターン化している）。④まんなかにある鈕（紐を通す孔をもったつまみ）が大きく丸く高いこと。⑤顔の映る鏡面（図1では裏側）はカーブミラーのように凸面になっていること。⑥これまで日本で見つかった数が500面以上と多いこと。⑦中国語の漢字銘文をもつものがあること（類似の鏡に魏の「景初」や「正始」の年号をもつものが少しあります）。⑧中国大陸や朝鮮半島では見つかっていないこと。⑨日本では近畿地方を中心に、北部九州から東北南部まで分布すること。⑩とても「上手な製品」（A・図1の鏡）と明らかに「へたくそな製品」（B）があること、などです。

この鏡の最大の問題は「いったいどこで作られたのか」です。漢字が書かれ、中国の神仙が描かれ、中国語の銘文をもつのですから、三国時代の魏や呉で製作されたと考えるのが普通です。しかし⑧の「中国大陸では出土しない」ことが最大の問題なのです。

〔解釈1〕 この鏡は『魏志倭人伝』に記された邪馬台国の卑弥呼の使者が魏の皇帝からいただいた「銅鏡百枚」にあたるもので、魏の「景初」の年号が使者の派遣された頃であるのがその証拠。邪馬台国向けに「特別に作られた」ために中国の普通の銅鏡ではないし、中国では出土しないのだ（特鑄説）。そのうち上手な製品（A）が魏から船ではこぼれた輸入品（船載鏡）であり、へたくそな製品（B）は「倭（日本）でまねた」のでうまくできなかったもの（仿製鏡）だ、とする説です。邪馬台国がどこに在ったのかがこの鏡の分布で分かるとするものです。

〔解釈2〕 この鏡が中国大陸で見つからないのは、そもそも「中国製ではなく」て、中国から倭（日本）に渡ってきた鏡作工人たちがどこか（近畿地方とか）で、持ってきた原材料をもとに「倭人の好み」に合わせて製作した鏡だ。中国人たちがある程度の数量を作った後に帰国してしまったので、倭の工人が鏡をまねたために下手（B）になったのだ。それに中国魏の皇帝が倭人の希望を聞いて「特鑄する」などとは思えない。だから邪馬台国の所在地論争とは関係しないのだ、とする説。

〔解釈3〕 この解釈1対解釈2が長い間の論争でしたが、最近、銅鏡の研究者に聞いた解釈は次のようなものです。上手な製品（A・船載）と下手な製品（B・仿製）の区分が明瞭ではなく、製作に連続性があるので、（A）も（B）も「中国大陸で作られたのだ」というものです。理由のひとつは同時代の倭（日本）で作られた銅鏡が意外にも上手で、銅質も上等なので、倭国で下手な鏡（B）が作られたらどうか？というものです（Bは中国製にしては下手すぎでは？との反論もありそうですが）。

いったいどれが正解なのでしょう？ また別の解釈もありえるでしょう。この三角縁神獸鏡の製作地論争はどうやら未来に引き継がれるようです。

（考古室 宮川禎一）